

# Al Wajh への道

小村 幸二郎

## オフィスの断面

サウジアラビア王国の経済行政上もっとも重要な位置を占めている石油鉱物資源省 Ministry of Petroleum and Mineral Resources の組織は大きくみて石油資源部門と鉱物資源部門とに分かれている(第8表)。本省と石油資源部門の役所は首府の Ar Riyadh にあり私たちが勤務した鉱物資源局 Directorate General of Mineral Resources と石油鉱物資源公団 General Petroleum and Mineral Resources Organization (PETRO MIN) は Jeddah にある。

鉱物資源局の最高責任者は Dr. Fadil K. Kabbani 次官だ。Kabbani 次官は非常に温厚な人格者で青年時代をこの国最大の鉱山として知られている Mahd adh Dhahab (金のゆりかご) 鉱山の探査業務に過ごし欧米に学んだ地質学者である。私たちが Al Wajh 地域でキャンプ生活を送っていた1964年12月下旬 単身来訪し 4日間にわたって キャンプ生活を共にし 調査地をくまなく視察され 夕食後の一時の語らいに 日本に残した私たちの家族のことにまで気を配って下さったのも Kabbani 次官だった(第47図)。東京オリンピック見物後10日間ばかり日本に滞在されて サウジアラビアへ帰られた次官は キャンプで私たちに その後の日本の様子をいろいろと話して下さい。朝夕の乗物のすごい混雑ぶり 制服を着た学生がすごく多いことなどは 何回か来日された次官にも 新たな驚きと興味を与えたい。

私たちは 羽田空港から都心へ向う高速道路がオリ

ニック直前に完成したことを 新聞で知っていた。どんな道路だろうかという興味もあって その状況を次官に尋ねると 次官は苦笑しながら 「あれは高速道路ではなくて 観光道路ではないかな」と返事された。なるほど 帰国してはじめて知ったのであるが 都心部を見下ろしながら曲りくねる道 しかも 制限速度70km前後とあっては 観光道路という名の方がふさわしうである。とくに 一歩市の中心部を離れたら 100km 以上の速度で走るこの国の人たちにとってみれば この道路は 高速道路というイメージからはほど遠いものがない。

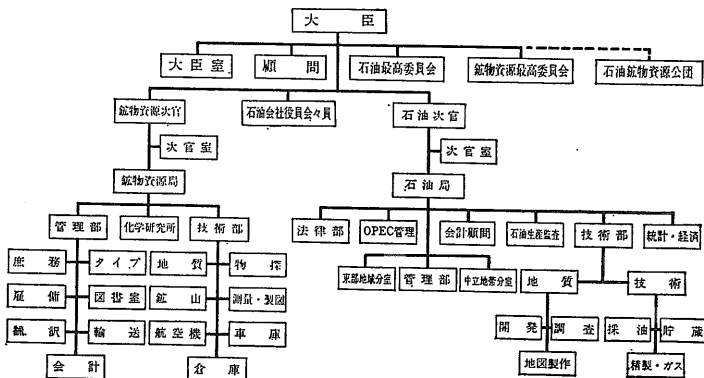
日本の役所ではとても考えられないことだが Kabbani 次官は 隔週毎に私たちの事務所に来訪され 私たちの仕事の進捗状況やその内容を質問されたり 時には 雑談に時のたつのを忘れ 「業務についても私生活についても要望があれば遠慮なく申し出て欲しい」と親切に言って下さることが多かった。そしてそうした温情に見守られながら 私たちは 不安なく 滞在期間を消化していった。

この国に来て間もなく 鉱物資源局から50mばかり離れた所にある一戸建の平屋が 事務所として 私たちに与えられた。この家は プレハブ建築で 住宅として建てられたものであるが 各室にはルームクーラーが完備され 作りつけの洋服ダンスや整理戸棚は 図書や資料の整理用にうってつけだし 大型冷蔵庫やガスレンジなども そのまま使える状態にあったので 事務所としてもたいへん便利だった。道路に面する 高さ2mば

かりの ブロック塀の内側には アカシヤなどの大木がうっそうと繁って緑蔭をつくり 事務所をぐるりと取巻く広い花畑には この国を象徴するナツメヤシをはじめ ヒマワリ・ケイトウ・アオイ・キンセン花など 色とりどりの花が一年中咲き乱れて 疲れを癒やしてくれる(第48図)。

だが 一年半の間親しんだこの家も 後に 物理探鉱関係の事務所となった。

第8表 石油 鉱物 資源省 の 組織



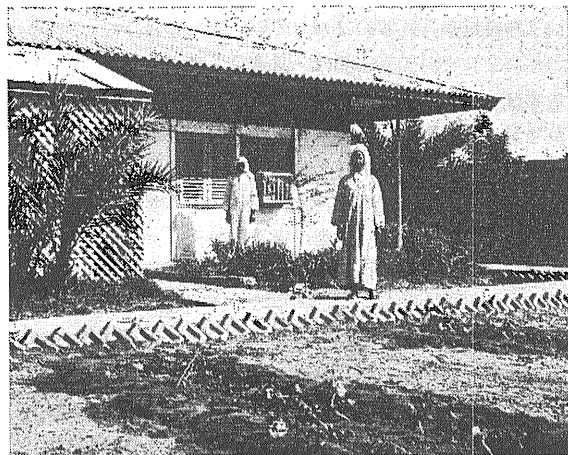
第2次調査団の事務所は 鉱物資源局から西へ約2kmはなれた バグダディーヤという所に移った。この建物は3階建て やはり個人住宅として使用されていたものだ。

第1次調査団の事務所よりもはるかに大きく 広い庭には褐色のタイルが一面に敷きつめられ ジャスミンの緑の葉と白いかれんな花とが あわい卵色の建物の外壁をいろどっていた(第49図)。頑丈な鉄の扉の横には黒地に白で大書された表札が掲げられ(第50図) 道行く人々の視線をしばしばとどめていたが この表札の一部に日本語が入っていたら 物好きでおせっかいやきのアラビア人の興味心を一層かきたてたことだろう。せっかくなじんだこの建物ではあったが 入居後およそ10カ月を経て 都合により 私たちは王宮の近くに建つ新築マンションの一角を事務所として使用することになった。

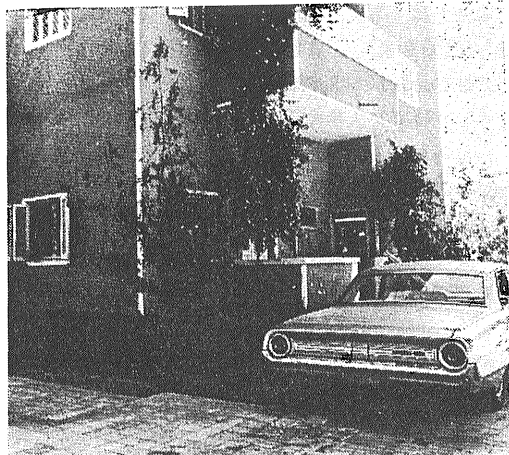
この国では いわゆるオフィス・レディをみかけることはほとんどなく とくに この国の女性が働きに出るということはまったくないようだ。したがって ごく一部を除いては 役所でも会社でも従業員はすべて男性である。門番は2交替で 勤務時間中は門の側におかれた長椅子にじっと腰かけていて 時折 雑役夫や来訪者とおしゃべりし 事務所の周辺を見回って時を過す。室内の雑役を受持つ連中は 室内の掃除とお茶番とがおもな仕事で 一日一回 鉱物資源局へ郵便物や書類を受取りに行く以外は大した仕事もない。だから 暇な時間をまずおしゃべりに熱中する。どういふことを話題にして話に興じているかは知るよしもないが 時折 大声ではげしくやり合っているのを聞くと 雑談している時でも 余程納得できることでない限り 自己の主張を押し通そうとするらしい。庭番は庭の手入れをするだけだ。定められた職場を守り お互いに 他人の受持ちの仕事に手を出さないということは 侵さず侵されず



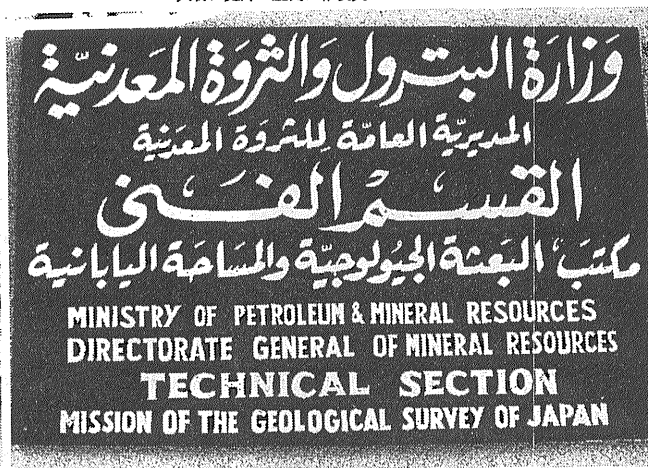
第47図 アブ・ナフィーラ鉱山を視察中の Dr. Fadil K Kabbani 次官 手をかけている岩には 金鉱を採掘したときに刻まれた碑文がみえる



第48図 第1次調査団の事務所と庭 この庭は花畑になっていたが 後でトマト畑になった 右側の人物は庭師 左側は雑役夫



第49図 バグダディーヤの第2次調査団事務所 白いかれんな花をつけたジャスミンが2階までのびている



第50図 バグダディーヤの事務所の入口に掲げられた表札

という点ではたいへんよいことであるが 不便なことも決して少なくはない。

雑役夫・門番・庭番・職員など どこにいても目につくのは 偉そうにヒゲを生やした 赤銅色の男ばかりで まったく味気ない(第51図)。 おまけに 着ている物も 白かネズミ色。 従って U.S.G.S. や B.R.G.M. ミッションのように 数人の女性が勤務している事務所やそこに勤務している男どもは羨望のまなざしで見られることが多い。 B.R.G.M. の事務所はバグダディーヤの私たちの事務所から100m ばかり離れた所にあり そこでは 余り大柄ではなくてプロポーションがよく 美しい金髪をふるわせながらタイプライターのキを叩いたり 事務をとるフランス美人が数人いた。 だから「B.R.G.M. に行く用事がないかな」などと 溜息まじりに問いかける同僚がいたとしても決して不思議ではない。 まして 徒歩2分位の所に B.R.G.M. の事務所があれば 連続6時間の勤務時間中 仕事が一区切りついた時 ふとそういう衝動にかられるのはむしろ当然かもしれない。

オフィスでの勤務時間は 夏季は7時半から1時半 冬季は8時から2時 断食期間中は10時から4時までであるが 野外調査の場合は 原則として 8時間である。 しかし 時には木蔭でさえ45℃以上にもなるような時期に 昼食なしで8時間も続けて調査業務に従事することは 体力的に困難であり 調査の進捗状況によって 適当な時間にキャンプへ帰ることが多い。

9月中旬から6月中旬までは 1カ月にわたる断食期間や休暇期間を除いて 野外調査に従事することが多い。 5月から10月まではかなりの暑さであるが 原則として 契約期間の50%に相当するおおよそ9カ月間を野外調査に費やすことになっているので 少々暑さはがまんしな

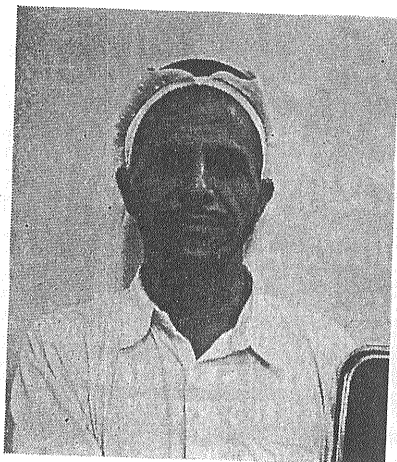
ければならない。 いわゆる後進国と呼ばれる国の通例として 少なくとも地質部門に関する限りでは 狭義の研究業務よりも資源調査が優先して行なわれる。 これはサウジアラビア王国においても例外ではないので 契約期間の50%に相当する期間を野外調査に費やすという原則が設けられているのも当然だろう。

Jeddah の事務所勤務の間は 調査計画の立案 それを実行するために必要な物品の整備・補充 文献による調査 必要な航空写真の判読 調査資・試料の整理などで 結構 時間がつぶれる。 日本での野外調査と異なり Jeddah の事務所を出発してから帰着するまで テント生活を余儀なくされるこの国では いざ出発するとなると準備だけでもたいへんだ。

最少限必要の自動車・人夫・運転手・コック・食糧・水・キャンプ用品一式をそろえるためには 少なくとも2週間位はかかる。 この準備期間中は 鉱物資源局への連絡 ガレージや物品倉庫での必需品の調達 人夫や運転手などの出入りなどで 事務所では まるで戦争さわぎのような あわただしさが続く。

1回の調査旅行で2カ月以上もキャンプ生活を送ることもあるだけに 自分たちの食糧だけでもたいへん量であり その大半は缶詰類だ。 第1次調査団は 現地で購入できる食糧で間に合わせようということで ミソ・ショーユはもちろん 日本食に類するものを一切持参しなかつただけに キャンプでの苦しい食生活を余儀なくされた。 来る日も来る日もトマトケチャップかソースで味付けされた食物が続くと 時には コックさんが 切角腕をふるって作った食物であっても 見ただけでうんざりすることがある。 まして 「青物」がきわめて 乏しい土地だけに 食生活にうるおいのないことこの上ない。 暑さに耐え 疲労に耐え そして食生活に耐えるのは決して楽ではない。 最初の1年半食生活に苦勞した私たちは 2度目の渡航の折には 日本食を十分に持参した(第9表)。 これらの購入費が215,685円 送料その他の合計が145,060円だったことは 今後 外国でこうした物品を入手希望の方々に 役立つかもしれない。 もっとも 苦勞して持参したこれらの食糧ではあったが インド洋の暑さと湿気の故か 「さきいか」はとけて一かたまりになり 「いりこ」は変質して黄色くなり 共に口にできる状態ではなかったことを付記しておく必要がある。

映画館もなければ味覚をそそるような料理を食べさせてくれるレストランもない Jeddah での楽しみは 市の中心から35kmばかり北へ離れた所にある紅海の入江で海



第51図  
偉そうにヒゲを生  
やした鉱物資源局  
のお茶汲みボーイ  
こういうヒゲはイ  
エメン人に多い

水浴場になっているアブホールで泳ぐか またはアメリカ大使館の敷地内に設けられている9ホールのゴルフ位のものだ。 もっともアラビア石油株式会社のご厚意で毎月2回 日本映画が上映されるようになってからは楽しみが倍增した。 ユカタにゲタバきでウチワを片手にやって来る人 ポロシャツに半ズボン アラビア服 背広など思い思いの服装で集まって ラムネならぬコココーラやジュースを飲み チョコレートや飴をしゃぶりながら 映画を見たり 雑談に時のたつのを忘れるのは楽しいものだ。 映画の合間に「オセンにキヤラメル」などと云って コカコーラや飴を配って歩く人の声を聞くといつきよき時代も思い出されようというものである。

映画が上映される場所によっては 私たちと一緒にこの国の人も何人か映画を見ることがある。 日本語がわかるわけではないのだが 映画の内容はあるていど判断できるのだろう。 彼らは まず日本の山水の美に驚嘆する。 そして強い者が好きだ。 うす汚れた着物の裾をはしょった盲目のアンマが 群がる悪人たちを斬り倒し 絶対に負けない映画などには拍手を惜しまない。

私たちが見れば何でもないシーンでも 彼等には不満なこともある。 恋愛映画のキスシーンなどはその代表の一つだろう。 そういうシーンが大きく映し出されると彼等は バス・バス(止める・止める)と云って 不満を表明する。 これなどは イスラム教のいましめを忠実に守っている人にとっては 当然の事だ。 お国柄というべきだろうか。

第9表 第2次調査団携行食料品類

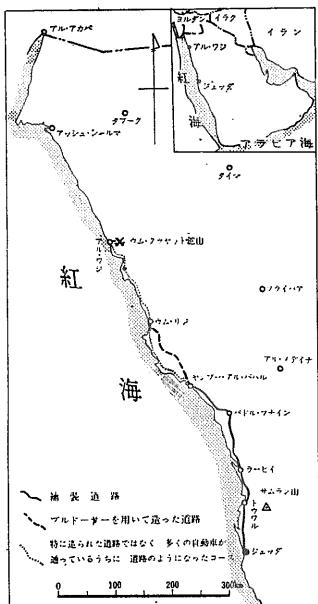
品名	数量	品名	数量
鹽	5	紅 生 姜	5ビン
フ レ ー プ	20袋	朝 鮮 漬	30缶
味 の 素 (小)	10缶	塩 昆 布	48ビン
味 七 唐 辛 子 (小)	10缶	の り 佃 煮	10ビン
×粉 わ さ び (小)	2缶	味 付 の り	5缶
乾 そ ば	20束	寿 司 の り	4帖
茶 そ ど	20束	赤 飯 弁 当	30個
う どん	60束	稲 荷 寿 司 の 素	30缶
即席ラーメン	150袋	梅 干	50ビン
〃 タンメン	150袋	花 落 京	30ビン
醬 油	5c/s	福 神 漬	48缶
即席ミソ汁	100袋	×白 玉 粉	5袋
即席赤汁	96缶	×片 栗 粉	5袋
即席カレー	100個	○小 豆	5升
×黒 胡 麻 (小)	3袋	×コンニャク粉	300g
×白 〃 (小)	2袋	さ き い か ん	30袋
と ろ ろ 昆 布	50袋	○羊 か ん	50竿
煮 わ か 干 め	4kg	○柿 の 種	5缶
千 切 大 根	10袋	○あ ら れ	5缶
京 麩	20袋	即 席 し ろ こ	30袋
ふ り か け	100袋	○焼 茶	50缶
沢 庵	48缶	○煎 茶	50缶
味 噌 漬	48缶	割 箸	60カン
		ぬ り 箸	60カン

注 ① ×印は一部残った物

○印の一部は在留邦人への土産として贈呈

### Al Wajh への道

キャンプ地へ出発の朝か前日の午後 私たちの事務所の前では 整列した大型トラック・2000ガロン入りのタンクローリー・中型トラック・ジープなど8~10台の車に 私たちの指図に従って 運転手・コック・人夫たち(第52図)が物品の積み込みをはじめ。そしてこの時から 私たちの彼等に対する勤務評定がはじまる。いつものことながら 調査旅行に従事する場合には 出発から帰着まで 通訳・運転手・人夫・コックについて勤務評定をし 帰着後にその結果を鉱物資源局に報告することになっている。 私たちは仕事に対する熱意・態



第53図 私たちがたどったジェットダからアル・ワジへの道

第52図 調査に同行した人夫と運転手たち 鉱物資源局勤務のれっきとした国家公務員だ この国の労働者としてベドウィンは 空缶でシャミセンのような楽器を作り それを弾きながら即興時に節をつけて歌うのが得意だ。モビールオイルの空缶を利用して作ったこの図の楽器の柄はナツメヤシの枝 弦は針金1本 弓の方の弦も針金1本だけであるが 結構美しい音色のメロディーをかなでることができる



度・友好関係を中心に 非常にすぐれている・すぐれている・普通・やや劣る・非常に劣るの5段階に評定してその結果を報告した。もし 3度続けて最低の評定を受けた者は 勤務成績不良ということで 退職させられることもある。だから 彼等は 野外調査の場合でも 事務所内で勤務する場合でも 必要に応じて「勤務成績優秀」という証明を書いて欲しい」と 所属の長に頼むことが多い。こうした国では 成績優秀であることの証明書が 就職や給料のペースアップあるいはポストの獲得にかなり有効なのだろう。だから 彼等の成績証明書に対する執着心はたいへんなものだ。

午前10時すぎ すべての準備を完了した私たちは 調査地へ向って Jeddah と Al Madinah とを結ぶメディナ道路を 北へ進んだ(第53図)。途中 3kmの地点にある日本大使館に寄って 出発の挨拶をし 調査地・キャンプ地点・帰着予定日を報告する。イエーメンでは相変わらずげいしい内乱が続き アラブ諸国とイスラエルとの間に一触即発の空気がただよっていたこの頃の時点での奥地における調査であれば こうしたことはとくに必要である。本誌161号と162号とに地質とはまったく関係のない中東状況について述べたのは 本誌がもつ本来の意義に沿わないことを熟知した上でのものであり 日本大使館から1000km以上もはなれたサウジアラビアとイスラエルとの国境間近かの奥地で調査業務に従事しなければならなかった私たちの姿を知ってもらったためだった。Jeddah から メディナ道路に沿って 約30km北上すると 道路の右側に検問所があり その後方には玄武岩台地が見える。海水浴場になっている紅海の入江の東端部に建つこの検問所を過ぎると 人家はまったく絶えて 右手には真黒の玄武岩台地が広がり 左手には灌木が点在する海岸平野が開けているだけだ。単調な風景の中を90km走って Tuwwal に着く。

この部落にはこじんまりとした小学校がある。先生 4人と生徒35名の 日本でならさしずめ 分教場といった感じだ。校長の Al Hamid Al Kahiemi 氏は ここで13年間も教鞭をとっている 温厚な人だ。授業が終ってがらんとした教室の壁には 10枚ばかりの絵がはってある。どれを見ても ナツメヤシ (An Nakhal) の林か または 青々とした広い海をゆく大きな船が画かれている。この国では ナツメヤシは貴重な財産だ。一にぎりのナツメヤシの果実で一週間を過ごすことができるということがその価値をよく表わしている。おそらく ナツメヤシの林を画いた子供たちの脳裏には 黄色の実をたわわにつけたナツメヤシの大木を無数に持つ

成人した自分の未来像が去来していたのだろう。この部落の近くには大きなオアシスがないので この絵は 多分 ささやかな記憶と想像とによって画かれたにちがいない。広々とした海をゆく大きな船の多くは漁船である。ここ数年来 食膳に魚が上るようになり 漁業が盛んになりつつあることを思えば この絵も 大海に漁する日を夢みる 子供のあこがれの表われであろう。しかし 私には まだ世の中のみにくさを知らぬ純真無垢の子供たちの夢が富に直接むすびついているように見えて 何となくさみしく思えた。

純真な子供たちの絵には それぞれの夢が卒直に画かれていて ほほえましさがある。どの絵を見ても 大胆で しかも上手だ。私は キャンプや事務所で この国の数人の青年に絵を画かせたことがあるが 完成されたそれらの絵が何を表わしているのか 判断できないことが多かった。少なくとも人物を画かせるとまったくサマにならない。鉱物資源局一といわれているコックが半日かかりで作り上げた 馬を形どったというお菓子を食べたことがある。一見 枝の多い枯木のようにやたらに出っばりの多いこの形は 強いていえば 前衛活花のようだ。誰がみても とても 動物を形どったという代物ではない。長くつき出た部分には 幾つかの枝のようなものがある。「これは何だ」と聞くとツノだという。「馬にツノがあるのか」と聞くと「ある」という。仕方なく 馬の絵を画いて「馬にはこのように 角はないんだよ」というと「ドクトルは絵が上手だ」といって はずかしそうにうつむいた。その時 多分 彼の頬ははずかしさで紅く染まったのだろうが あいにく 彼はアフリカ南部からの移住者の子孫で まるで消炭のような肌をしていたため それを見届けることができなかった。

子供たちの絵に比べると大人たちの絵は段違いに下手だ。なぜ こうまで差があるのだろうか。私には はっきりは分らないが この国の人たちが およそ1500年にわたって 偶像を拒否しつづけてきたイスラム教のきびしい掟の中で生きて来たことを思うと おそらくイスラム教が完全に根をおろして以来最近まで絵筆をとることがなかったからではなからうかと思える。多分 現在25才前後の人たちは 絵を画くことをゆるさなかった古くからの習慣を残している 最後の人たちかもしれない。

Tuwwal から 谷に沿って 東へ約55km入った所にある Jabal Samran (サムラン山) は 試錐を主とする銅鉱床精査が行なわれているので ここ数年来 注目を浴

びている。比高300m 足らずの急峻なこの山の中腹から頂上付近にかけては 孔雀石を主とする銅鉱脈の露頭やそれらに沿った古い探鉱跡が点在している。山麓の一隅には 珍しく 清水が溜っていて私たちの喉をうるほしてくれた。1965年12月の半ば 私たちがここを訪ずれた折には イギリス人の Kollins 氏が試錐を行っていた。赤鼻でノンキナ父サンそっくりの顔をしたこの試錐技術者は いつも ズボンの前ボタンをはずして平然としていた。「鳥が飛んでるよ」と冗談まじりにいうと「この方が風通しがよくて涼しいんだよ」と返事する。まったくのんきな面白い独身男性だ。

Tuwwal から70km で Rābigh に着く。ここは メディナ道路に沿って点在する部落の中では一番大きくすぐ近くに漁港を控えているので魚が豊富なせいか いつも食事客や休息する人たちでにぎわっている。1965年に 尾ビレにゴラーン—イスラム教の聖典—の句の一部を模様にもつ魚が陸揚げされて話題になったのもこの部落だ。道路の両側には茶店と商店がずらりと軒を連ねており すぐ近くにはオアシスを控えていて結構なたずまいである。

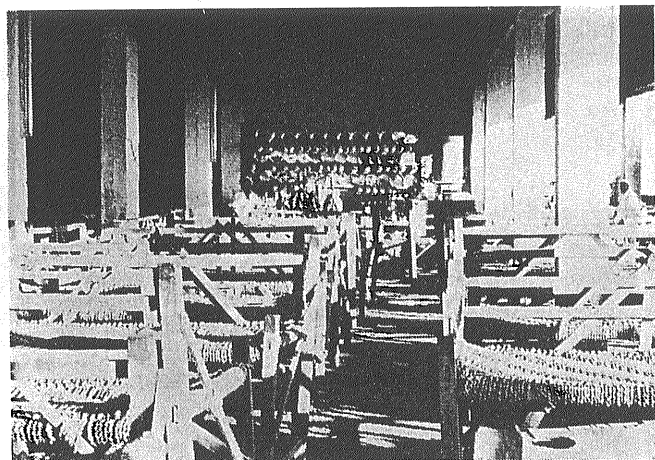
私たちも 調査旅行の途中ここで車を止め ナツメヤシの葉を編んで作った背の高い椅子にアグラをかいて紅茶を飲み できたての魚の唐揚げと焼飯を賞味したものだ(第54・55図) ホーローびきの皿にもられた焼飯も魚も 私たちの口に合って 実に美味しい。しかし 切角の料理にたかる蠅の何と多くそしてしつっこいことかはじめての人なら きつと その蠅を見ただけでまず食欲がなくなるだろう。その蠅たるや 人のことなど構っちゃおれないといった風情で 食物にたかる位ならまだしも 口を開けていれば容赦なくとびこむし 耳や鼻はもちろん目の中にさえとびこもうとする。きつと結

んだ口元に10匹位たかることも決して珍しいことではない。

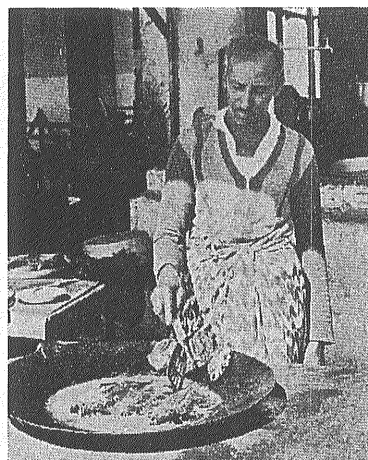
清潔家を自認している私にとってこれはたいへんなショックだったが とにかく食べなければこのきびしい自然条件の中で五体満足ではありえないということもあって 日がたつにつれて 次第に気にならなくなっていた。何事によらず 慣れるということは大切だ。

食事を終わって小休止した後出発しようと思っていたが いつまで待っても 車の動く気配が一向にない。同行の通訳に「食事も終わったし 出発しよう」というと「日中は暑くて車が故障しやすいし 運転手も同乗者も疲れるから 午後4時頃 涼しくなってから出発する」という。そして私は「ガマン会」に出場するような立場におち入る破目になった。赤ん坊の頃はいざ知らず物心ついてこの方 私はのんびりと昼寝をしたことがない。まわりを見ると 同僚も人夫たちも 心地よさそうに安らかな寝息をもらし 中には大きなイビキすらかいて睡っている。結局 昼食後3時間ばかり ぐっすり寝込んだ連中を横目で見ながら 私はうるさい蠅とケンカのし通しだった。

街道一の宿場? だけに この部落には 旅行者目当ての物売りがさすがに多い。多くは薄汚ないアパヤをまとった中年以上の女性で その装束から想像すると エジプト(アラブ連合共和国)あたりからの移住者らしい。売物はウデ卵だ。ベル・ハムサ・リヤネン「卵5コ2リアル」とかなりしつっこく売りつけようとする。この国へ来た当時は 片言のアラビア語で「ダヘン・シアーバン・アシアーン・アナ・アクル・ロツズ・ワア・サマツク・ケティール(飯と魚をたくさん食べたので 今腹一杯だ)」と断っていたが そんな



第54図 ラビエの茶店の内部にならぶ椅子 前方の壁にかかっているのは ホーローびきのキユースと銅製の盆

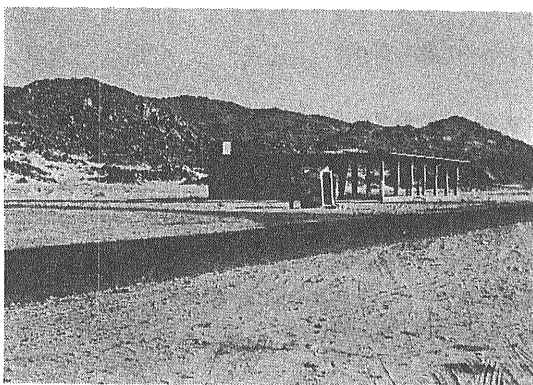


第55図 魚を唐揚げする茶店のコックさん

な程度でおめおめと引下るようではとても商売にならないのだろう ちょっとやそつとでは決して諦めようとはしない。少しなれてからは この連中を見たときに狸寝入りをするに決めた。それでも顔をなでられたり 肩をつつかれたりするので 狸寝入りを決めこんだものの 一念発起 初志貫徹にはかなりの忍耐が必要だ。

暑さもようやく峠を越え 砂漠を渡る風が幾分冷気をおびる頃 Rābigh を後にする。広い砂漠を一直線につっ切ってどこまでもどこまでも続く真黒の補装道路を全車快調に飛ばしておよそ1時間半の後聖都 Al Madinah へ通ずるメディナ道路と Yanbu al Bahr への道との分岐点に当る Badr Hunayn に着く。ここには警察と茶店が1軒あるだけで殺風景ではあるが 茶店の後方には高さ20mばかりの砂丘が横たわり 前方には先カンブリア時代の Jiddah Greenstone が荒々しい肌を見せて道路に迫り 単調な風景を救っている (第56図)。

ここから Yanbu al Bahr までは約90kmだ。調査



第56図 メディナ道路とヤンブー・アル・バハル 道路との分岐点に当るバドル・フナイン 中央の竊模様のものはポリスボックス 前方の丘は Jiddah Greenstone と呼ばれている先カンブリア紀時代の岩石によって形成されている

地へは Al Madinah を経由しても行けるが 迂回することになるので 私たちは Yanbu al Bahr 経由の道を選んだ。右手には相変わらず先カンブリア時代の岩石が遠く続き そのあらわな肌の所々には 黄白色の小さな砂丘が幾つもつらなっている。大部分が直線でたまに曲る補装道路をひた走るとは 近くに対象物がないので 余りスピード感がなく 乗用車などは 120~150kmの速度で走る。

大型トラックでさえ 100km 位の速度で走ることが決して珍しくない。対行車は少なく 一直線にのびる道路が完全に補装されている故で つい油断するのだろうか 一旦事故が発生すると死に直結することが多い。そうした車が 腹を見せ 赤く錆びつくままに道路傍に放置されている姿が目に入る (第57図)。

Badr Hunayn を出発してからおよそ 80km 宿泊予定地の Yanbu al Bahr がまるでシンキロウのように前方に見える。午後3時頃までにこの町にさしかかると 前面の砂漠一帯はシンキロウで青々とした湖のように見え その後方には白亜の軒を連ねる町並が浮かんで いかにもアラビアらしい風景をかもし出す。この町の人口も急速に増えているのであろう 町へ入る7km位手前から 道路の両側には 住宅用地の区画を示す石柱が整然と立ち並んでいる。

Jeddah からおよそ 360km 無事に着いた (第59図)。ここは 第一次世界大戦の折 トルコ軍に立向うフセイン軍の救援を目的として イギリスの T.E. ローレンス大尉が上陸した港町だ。町の入口には検問所があり 車の所属・番号・運転手名・旅行目的・行先等が調べられる。Jeddah 以北では紅海に臨む最大の港をもつだけに その岸壁には大型貨物船が横付けになり いろいろの物資が陸揚げされている。町も中々にぎやかだ。せまい路地にひしめくように 商店が軒を連ねている市



第57図 メディナ道路で転倒した急激車 運転席は完全に押しつぶされ乗員は即死したらしい 前方のバスはメディナへの巡礼者を乗せた車で屋根にのせた荷物が道路に落ちていることがある



第58図 ヤンブー・アル・バハルの町にある給水場でタンクローリーに水を入れる この車は 2,000ガロン入りで 長期間のキャンプ生活にはなくてはならない車だ 後方の車も調査用車

場には溢れんばかりの人だかりがし 日本人をはじめて身近に見るのだらう 彼等の波をぬって歩く私たちを好奇に満ちた目で見る者が少なくない。

この国へ来てはじめての自動車旅行の故か 大して食欲もなく パンとインスタントスープの夕食を終えた後 Jeddah から持参したミカンとバナナをうんと食べて寝ようと思っていたが これらの果物は一向に私たちの前に姿を現わさない。 コックに「ハートリ・モズ・ワァ・ポルトカン (バナナとミカンを持ってこい)」という と すかさず「タイプ・アスバル・シュワイヤ (OK ちょっと待って下さい)」という返事がかえってきた。 箱から出して もの10mも運べばすむことなのに ずいぶん時間がかかるので変だなと思っていた処 ようやく運ばれてきたバナナもミカンも 何と 皮をむかれ 小さく切刻まれ おまけに うんざりするほど 蠅がたかっていた。 そして 手を出す同僚もなく 切角の果実はほとんど全部残ってしまった。 食物を含めて必需品の100%近くを外国から輸入しているこの国では 蠅ですら夜更けまで働かなければ 満足に生きてはゆけないのだらうか。 自分こそは鉱物資源局随一の名コックだという誇りをもっているらしいイエーメン出身のこのコックさん (第61図) は 勤務評定も気に入り 日本人とはじめての旅行第一日目ということもあったのだらう サービス精神を大いに発揮したつもりだったので すが 皆がほとんど手を出さなかったので きつとがっかりしたにちがいない。

結局 360km もの距離をはるばると運ばれてきたバナナもミカンも 私たちの腹には入らず コックや人夫や運転手達の栄養源と化した。

11月6日午後10時の気温27℃ 頬をなぶって通りすぎ

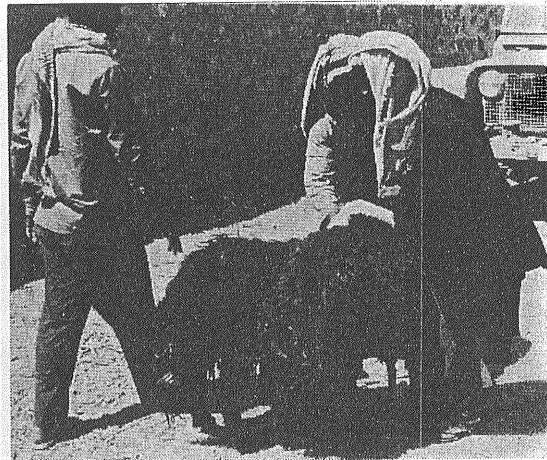
る海風が心地よい。 快晴の空に冷たく光る無数の星の下には 焼けつくような暑さも 砂ぼこりも そして騒音も すでに絶え 静寂のペールがこの荒々しい大地をやさしくつつむその片隅で 私たちは 夜露にうたれながら 深いねむりに陥ちていった。

Jeddah からの補装道路は Yanbu al Bahr で終り これより北には道らしい道はない。 しかし 1965年に Yanbu al Bahr と Umm Lajj とを谷沿いに結ぶ道路がブルドーザを用いて 完成されているので この間に関する限りでは 現在は自動車旅行も割合に楽だ(第63図)。 この道路は遠距離旅行者や物資の陸送の便を考えて造られたのであろうが アラブ諸国とイスラエルとの関係が悪化しつつあった建設当時のことを思うと北辺の守りに役立ただせる軍用道路の一つとしての性格も兼ね備えているのかもしれない。 ここでは 便宜上 この道路沿いの状況や旅行経験についての記述を割愛して 今では通る人もきわめてまれな 第1次調査団が最初の旅行でたどった紅海沿いのコースを北上する。

宿泊地 Yanbu al Bahr の11月7日午前7時 気温は24℃であるが 寒い。 東に連なる山の端から太陽が顔を出すと またたく中に29℃になる。 大急ぎで朝食をとり 後かたづけをして出発した私たちは 砂漠をよぎり (第63図) 岩石砂漠を越え Wadi (涸谷) になやまされながら 暑さと砂塵の中を 前者の轍を見失わないように全神経を集中して 走りつづけた。 東から西へ向う谷にほとんど直交して走るため 走路の起伏がはげしく 肩が車のドアにぶつかるのはまだしも ときには脳天を幌枠にぶつけることさえある。 紅海沿岸特有の塩分をたっぷり含んだ湿気と暑さの中を 前後左右にゆられながら走りつづけるのはたいへんだ。 まれに



第59図 ヤンブー・アル・パハルの市場にある木炭売場 この一袋の代金は約400円



第60図 ヤンブー・アル・パハルで羊を買う人夫たち 彼らが羊を買う時は 必ず歯グキ・歯・脂肪袋を調べる



ラクダがのんびり歩いている他には 人家もなければ人影も見当らない(等64図)。 何度か停って エンジンを冷やし 後続車を待つて事故のないことを確認した後でまた走ることの連続だ。 容赦なく照りつける太陽の下に見えるものといえば茶褐色の岩と白い砂ばかりで 気をまぎらわせてくれるものはさらさない。 こういう所で行き倒れでもしたら 傷つきあるいは老いさらばえて歩くことさえままにならないラクダや羊同様に 身体中の水分が蒸発して死に絶え やがては白骨と化して熱砂の中に埋もれてしまうのであろう。 今日も昼食抜きでビスケットと今にも爆発するかと思えるほど熱いコココーラとで空腹を満たした。

地表では一滴の水さえ見当らないのに 地下にはやはり水の流れがあるらしい。 Yanbu al Bahr を出発してから Umm Laji に着くまでの間に 2カ所で井戸を見た。 いずれも 塩分が多く しかも濁っている 飲料水としては適当でないが 家畜用の水としては十分だ。 例に洩れず この井戸でも ベドウィンが 数10頭の羊

と山羊とを連れてきて 水を飲ませていた(第65図)。

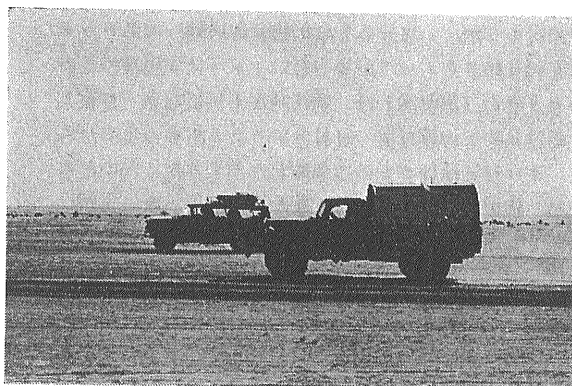
2番目に見た井戸は Umm Laji の南方 65km付近にあり 地表から 1.5m 位までは石灰岩を積重ねて補強してあるが それから下は Wadi 堆積物の中を掘りっぱなしである(第66図)。 水位は地表から 6m位の所だ。 試しに皮袋に入れた汲み上げたばかりの水をなめてみると 黄色く濁った水は 塩っぽく 皮の臭いでくさい。

Yanbu al Bahr を出発してから約 120km Umm Laji の町を目前にして 私たちは最大の難所にさしかかった。 Jeddah を出発する直前に 局長から「Umm Laji の 2kmばかり手前に満潮時には通れない所があるから 干潮時を見計って通った方がよい」と教えられた所だ。 ここでは 右手に広がる砂漠の砂が 細粒で厚く 波打際まで迫っているのだから どうしても汀線付近を通らなければならない(第67図)。 前輪駆動のきかない大型車でも不安なく通れる潮時を見計らって これまで精一杯走りつづけたつもりだったが この難所にさしかかった時にはすでに 満潮を目前に控えた時刻になっていた。

事故の発生に備えて この難所の手前で全車集合する。



第61図 第1回の調査旅行に同行したイエーメン出身のcock モハムード 帽子は日本製 鞆がって色眼鏡をかけているが 200円位の代物だけにきつとそのうちに目を悪くするだろう



第62図 ヤンブー・アル・バハルからウム・リジへ通ずる道路を行く調査用車 時速 100km 位で走っているが 海岸に近いので湿度が高くあまり砂塵が上らない



第63図 アル・ワジ南方の砂漠で後続車を待つ調査用車 どちらもピック・アップ型トラック



第64図 わずかばかりの灌木が生えた砂漠をのんびりと行くらくだ 付近にはベドウィンのテントも見当らないが 夕方には彼等のテントへ帰るのだから

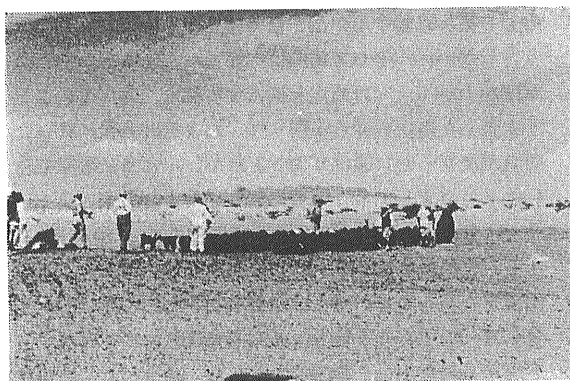
この難所をもう何回も通ったことがある運転手のアブラヒムが 運転手たちに通過要領を説明する。 インドネシアから移住してきたこの男は 小柄ではあるが 滅法気が強く 鉱物資源局に勤務している運転手たちのチーフでもある。 一通りの説明を終ったアブラヒムが まず フォードのピックアップ型の中型トラックを駆って左車輪だけを水に入れながら 一気に走り抜けて 安全な場所で後続車を待つ。 中型トラックとランドローバーは これにならって 次々に 無事通り抜けた。 いよいよ大型トラックの番だ。 テントをはじめキャンプ用品や薪などを積んだ真赤なトラックは 皆が見守る中を 物凄いうなり声を発しながら 無事に通過する。 これを見て安心したのだろう アブラヒムの車を残して先に無事通過した連中は 一刻も早く町へたどりつきたいのか 後の車には目もくれず Umm Lajj を目指して まるで気でも狂ったようなものすごいスピードで走り去った。 最後はガソリンや水を積んだ大型トラックだ。 先導車にならって汀線沿いに走り出したまではよかったが この運転手は 多分水におびえたのだろう

動き出して間もなく 魔物にでもみ入れられたようにずると深みへ入っていった。 遂に立往生だ。 間もなく満潮というときだけに 一時はどうなることかと心配したが 残った者の総力で 一時間余りの後無事救出に成功して事なきを得た。

この時 誠心誠意 最大の努力をしたのは白髪のガイドのメイーズだった。 胸まで水につかって懸命の努力をする彼の姿は その後も 私たちの業務にどれだけ役立ったか測りしれない。

Yanbu al Bahr からわずか 120 km ゆっくりと昼食をとることもなく走りつづけたつもりだったが Umm Lajj に着いた時にはすでに 7 時間を経過していた。 心身共に疲れ果てていた故か 到着早々に飲んだ冷えきったコココーラの味はいまだに忘れられない。

Umm Lajj の町は紅海にのぞみ サンゴ礁を四角に切って積み重ねて造った家の構造も 家の外壁が白く塗られていることも 他の町とまったく同様だ。 町の東側にある深い谷は 町のすぐ近くで 幅を広げ まるで運



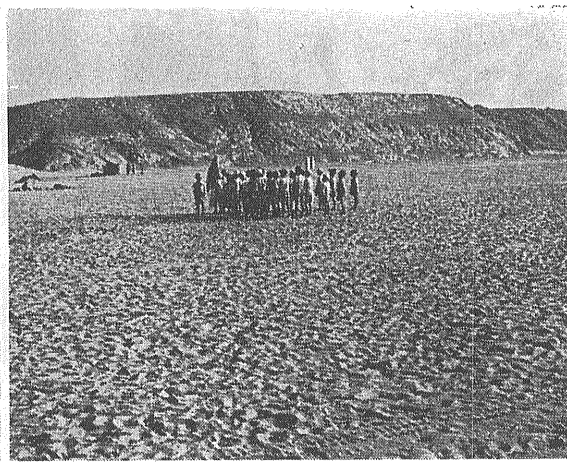
第65図 ウム・リジ南方の井戸に羊に水を飲ませにきたベドウィンの女 (右はし黒装束)



第66図 ウム・リジ南方で見た砂漠の井戸 上の方だけ石灰岩を積み重ねて補強してある



第67図 ウム・リジ南方 2km 付近の難所を行く調査用トラック 左側は紅海 右側は砂砂漠



第68図 ウム・リジの広場で体操する小学生 左はしの子供だけはカメラの方を向いている きれい好きらしい先生は背広の上衣を着ている 前方の丘の上半部は古いサンゴ礁

動場のようだ。その表面はさらさらとした細かい砂で幼児がころんでもカスリ傷さえできそうにない。この広場の北側と南側とにビョウブのように連なる古いサンゴ礁の台地がその間の広場に砂を堆積する役目を果たしたようだ。

後日 この町で泊った翌朝 この広場では先生の指導で小学生が体操をしていた(第68図)。私たちが近くで見ていた故かもしれないが先生の教え方はきびしく手にした長さ50cmばかりの鞭がびしっぴしと音を立てることも1度や2度ではなかった。そうしたきびしさは現在の日本ではとても考えられないことだろう。

子供たちはお国柄にかかわらず無邪気なもので登校の途中道路傍のやわらかい砂の上に坐りこんでハサミ将棋に似たゲームを楽しんでいる姿もみられる(第69図)。駒は小石か乾燥して白っぽくなったらくだの糞である。一般におせっかいなこの国の人たちはそうした子供たちの遊びにもすぐ興味をもって仲間入りしたいらしく数人の大人が子供たちのそばにたむろしてああでもないこうでもないといううるさく口をはさんでいた。そしてどうかすると子供たちそっちのけで手を出すこともある。とかく負けず嫌いな連中のことだけにしばらくすると誰と誰が対戦しているのかわからなくなってしまふことさえある。まるで野次馬の見本みたいだ。れっきとした碁盤の裏側に対局を見ている人が口出ししないようにという意味で梔子くわんしが彫刻してあってさえ余計な口出しをする者が幾らもいる位だから大地を盤代りの対局とあっては口出しする者がいたとしても当然かもしれない。

登校する子供たちは一様に手さげ鞆を小脇に抱えている。その中の2・3人にカメラを向けると「自分

を撮せ」といいながら一斉に多勢の子供たちが集って来て人より一步でも前へ出ようとするのでピントを合わせるのに骨が折れる。しばらくは横でこの様子を見ていた人夫の一人がついにたまりかねて飛び出し右往左往しながら子供たちを横にならばせはじめた。その間に少し後退してレンズをしぼって撮影したのが第70図である。子供たちのこうした姿を見ていると群集心理にかられた上でのことだとはいいながらイスラム教徒なるが故に長い間きびしく守り継がれてきた偶像拒否の習慣も日進月歩の発展と変貌との織りなす現代社会の荒波の中にすでに過去のものとして果てようとしているように思える。冷え切ったコココーラで喉をうるほした後この町で泊るかまたは先へ進むかで人夫や運転手たちの間にはげしい口論がはじまった。まったく無理もない。空腹を満足に満たしてくれる物も食べずに焼けつくような暑さの中を走りつけて来ただけにとくに運転手の疲労はいくら慣れているとはいえ並たいていではない。

なぐり合うことをしない彼等はすごいロゲンカをする。相手のいうことが気に入らないのか自分の弁舌に酔いそして益々昂奮するのか自分の主張を絶対に撤回しようとしぬ。そして結局は弁舌のたくましいほうに軍配が上がる。口角泡を飛ばす口論も先へ進むことを主張した連中の弁舌が勝っておよそ20分後に終わった。勝負が決まると口論はピタリと終る。たまたみ取組み合いのケンカをしても両者の間に誰かが割って入るとすぐに仲直りして口づけしたり手をつないで散歩したりする。ケンカをしている2人は案外止に入る人の出現を心待ちしていることもあるようだ。私たちがから見れば「とてもそう簡単に仲直りできるものではない」と思えるのだがこの国の人たちはそうしたことが身につについているらしく特別のことがない限りかなりは



第69図 ウム・リジの朝7時半 登校する小学生が道路傍でゲーム楽しんでいる 右側の大人が駒を進めようとする子供の手を押えてしきりにおせっかいをやっている



第70図 ウム・リジの朝 2・3人の小学生を撮そうとしていたら近くに居た子供達がごらんの通り一斉に集ってきた 左側横向の男は子供達を整理する人夫

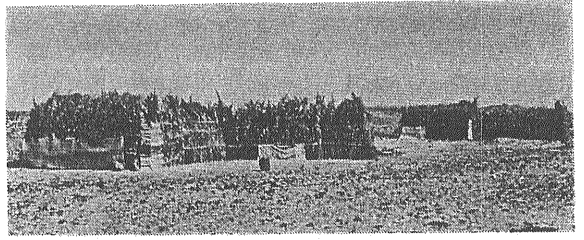
げしいケンカをしても 一旦それが納まると さらりと忘れることができるらしい。もし 世の一般の人々が こうした面を 先天的なものかまたは当然のこととして 幼い時から身につけていたら 惨劇もそしてみにくい争いも起こらないだろう。しかし 自分一人でさえ満足に生き抜いていくことのむずかしい現在の世の中では 仮りに平和が訪れたとしても それはあくまでも永遠のものではあり得ないように思える。

広大なナツメヤシの林を通り 紅海のなぎさ近くに点在する漁民の住居(第71図)を見て Umm Lajj を出発してからおよそ一時間半の後 珍しく高い木が立ち並ぶ植生地に着いた。目的のキャンプ地だ。Umm Lajj でここまで来ることを強く主張した連中の思惑もこれで読めた。キャンプする場合の不可欠の薪がここでは割合に容易に無償で手に入るからだ。Umm Lajj で泊るとなると 近くに植生地がないから 薪を買わなければならないので思わぬ出費を要する。長さ1mばかりの細い薪の束(第72図)が320円もすることを思えば 少々疲労もいとわれないは無理からぬことだ。

大木が生えているとはいっても キャンプする人の多いこの場所で 必要量の薪を確保するのは決して容易ではない。生木を折らないということと たとえ薪が豊富にあったとしても 後で来る人のことを考えて 決して一人占めにしないという 生活の智慧が生んだ砂漠を旅する者の心得は守られなければならない。

私たちがここでキャンプした時は薪が乏しかった。それで 到着早々 食事の準備をする者の他は 薪を求めて思い思いの方向へ散って行った。

それから1時間ばかりの後 彼等は それぞれ 何がしかの薪を持って帰って来たが 唯一人ガイドのメイズだけが中々帰って来ない。ようやく陽が沈もうとす



第71図 ウム・リジ北方約7km 紅海の波打際近くに点在する漁民の家  
材料はナツメヤシの枝と幹と葉

る頃 双眼鏡の視野の中に 豆粒のような人影が入った。それがメイズであることは間もなく判ったが 大束の薪を左肩に担いで歩く姿が普通ではない。やがて肩で息をしながら帰って来たメイズの足元を見ると 長さ5cmばかり破れた足の甲から血がふき出ている。血を嫌うアラブの例に洩れず 人夫や運転手達は おろおろしながら見ているだけで 手当てをしてくれようとしめない。早速 日本から持参した薬で治療し ガーゼと油紙で押えてホータイをしてやった。手当てを終えて立上ったメイズの顔には ようやく 安堵の色が浮かんだ。彼は ふしくれた右手をさしのべて「ショックラン・ショックラン・ジェッダン(有難う 本当に有難う)」と何度も礼をいう。メイズの声にほっとしたのか 見ていた連中の緊張もほぐれたようだ。ごく当り前のことをしただけなので 繰り返し繰り返し礼を言われるので少々てれた。

こうしたことはその後も何回かあったが そうした私たちのささやかな善意が 調査を手伝い キャンプ生活を共にした現地の人たちに 私たちに対する尊敬の念と親近感を抱かせ 長期間にわたる私たちの調査が大過なく進められていく上の大きな支えとなったことを知って やはり人間は肌で接してはじめてお互いの真意が通



第72図 市場に出された薪と木炭(右方と中央の袋)



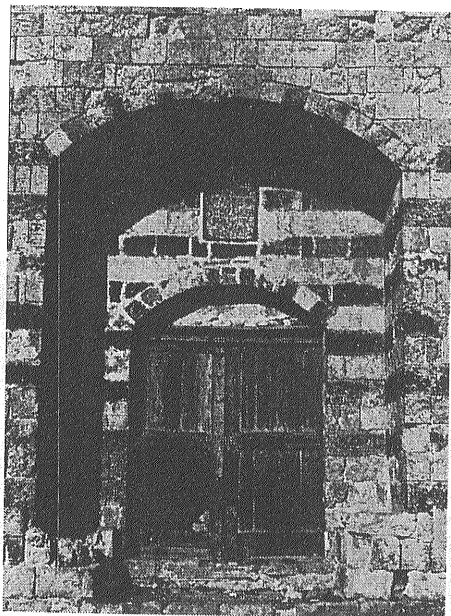
第73図 トルコが Wadi Zurayb (ズライブ谷)の入口に建てた砦 後方の山はほとんど珉岩と変玄武岩 手前の礫のある部分は広い Wadi (瀆谷)の典型的なもの1つだ

ずることを痛感した。

鉱物資源局に勤務している数多くのガイドの中で一番優れているといわれるメイズ。不言実行 黙々として自己の責務に邁進する毅然とした彼の態度には教えられることが多かった。私のサウジアラビアにおける数々の思い出の中に 今もなお 強く生きつづけるアラブの男メイズ。 瘦身隻眼の老駝が今も眼に浮ぶ。

薪も十分に集まった。 後は食事ができるのを待たばかりだ。 イェーメン出身のコックさんはまだ明るい中から夕食の準備にとりかかったが 「待てど暮せど来ぬ飯は」と歌いたくなるほど時間がたっても 夕食が私たちの所に運ばれてくる気配はない。

待ちくたびれて腹具合が少々おかしくなるころになってようやく料理が運ばれてきた。 時に午後九時。 人夫や運転手たちは もうとくに食事を終り 空腹をかかえて待ちかまえている私たちを横目で見てはにやにやしながら お茶を飲んだり ふざけあったり 日本製のトランジスタラジオから流れる音楽を聞いたりしながらのんびりと夜を楽しんでいる。 作る時間からみて さぞや手のこんだ料理を食べさせてもらえるだろうと期待していただけに 運ばれてきた料理を見た時には 本当に魂消てしまった。 何と 3時間近くかかってでき上がった物は 白飯にスープと羊肉の煮たものだけだ。「ハダ・パス (これだけか)」と聞くと テーブルの側にしゃがみこんだコックさんは「アイワ (はい)」と上目づかいに笑すらもらしてすましている。 私たちは 一瞬ポカンとしてしまった。 そして誰云うとなく「この程



第74図 砦の正面入口 サンゴ礁石灰岩の切石を積み重ねて造った砦の入口にはトルコ語の額が掲げられている

度のものなら俺にだって30分もあればできる。 準備時間を入れてもせいぜい1時間だ」 「腹がへりすぎて食欲がなくなったよ」などと がやがやぶつぶついいながら 結構料理を平らげ この夜も蠅と蚊に悩まされながら露営の夢を結ぶこととなった。

食事時 私たちにパンを投げてよこしたのも またうるさくそしてしつこい蠅を追い払って落着いて食事もできない私たちを見て ご飯やおカズにとまっている蠅をめがけて殺虫剤をたっぷりかけてくれたのもこのコックさんだった。 人夫や運転手たちが 食事時に 私たちの方を見ながらにやにや笑うはずだ。 この国へ来てはじめて調査旅行に出た私たちに同行したコックは 名前はモハムードで中々立派だが 鉱物資源局に勤めているコックの中では最低だったのだ。

このキャンプ地から Al Wajh までの間でも暑さと悪路とに悩まされた。 一寸砂が厚いと大型トラックの車輪がもぐって立往生するので 身軽な車と大型車との間隔はひらく一方だ。 車中で 昼食代りにビスケットを食べ 生温い缶入りジュースを飲んで空腹をしのぐ。 途方もなく広い砂漠のどまん中を走っているのに日陰はないし 町と町とは 200km 以上も離れていることが多いので 走っている途中で事故でも起こしたら大変だ。 ガソリンや水を積んだ大型トラックと修理工を乗せた車は最後尾を走ってはいるが 多くの人手を要する事故が発生しないとも限らないので 先に行く車は 30分かせいぜい1時間も走ったら停って ボンネットを開けてエンジンを冷やしながらか後続車を順々に確認する必要がある。 時には小一時間も後続車を待たなければならないこともあるので こうした土地では 出発地から目的地までの距離によって所要時間を割出すのはむずかしい。

塩分でかためられて アスファルト舗装道路と見まがうばかりの汀線近くのコースを快調に飛ばしていた時 前方に 停車している真赤なトラックが見えた。 この炎天下で何をしているんだろうと思って近寄ってみると 20人ばかりの客を乗せた Umm Lajj 経由 Yanbu al Bahr 行の貨客混合定期便だ。 「どうした」と聞くと 「どうしてもエンジンが始動しない」という。 私たちの仲間の車はとくに先へ行っているはずなので「鉱物資源局の車が通らなかったか」と聞くと「通らなかった」という返事だ。 新しもの好きの運転手は 無数の轍が刻まれたこのコースを敬遠して 車あまり通らない別のコースを通って行ったにちがいない。 先へ行った車との間隔をあまりおくことは好ましくないので 運転手と通訳に「先を急ぐから Al Wajh へ着いてから

救援を頼むことにして 出発しよう」というと 「それは不可能です」という。 その理由を質問すると 「事故で動けない車に遭遇したら手をかさなければなりません。 もしこの車に手をかさなかったら この車の故障が直って Umm Lajj や Yanbu al Bahr に着いた時 私たちが援助しなかったことを 車の所属と番号と共に警察に報告するか または Al Wajh へ向う他の車に援助してもらった上で その車に Al Wajh の警察へ届け出ることを頼むでしょう。 そうすると 届け出のあった警察の所在地を私たちが通る時 運転免許証を没収されます」という。

なるほど こういう土地では それ位のきびしさがなければ 旅行者がミイラになりかねない。 これも生活の知恵の所産の一つなのだろう。 止むなく 修理工の到着を待ち そのトラックが砂塵をまいて 砂漠の果に消え去るのを見届けた上で出発することになった。

Jeddah と Makkah や Al Madinah などを結ぶ舗装道路では 私たちが日頃利用しているような バスや小型バスが定期的に運行されている。 真赤な色の車が圧倒的に多いこの国で すばらしい道路を コバルトブルーか淡緑色と白とのツートンカラーに塗られた日本製のマイクロバスが 快調に走っている姿は実に涼しげだ。

しかし 道路らしい道路のない奥地では バスの運行が困難なので 大型トラックが 貨客混合の定期便に利用されている。 時には 炎天下を 1,000km 以上もトラックの荷台の上でゆられながら 野営の旅を続けなければならないわけだが 暑さと悪路とが私達の想像を絶する土地だけに その苦労たるやたいへんなものだ。

予期せず時間を費やしたが やはり良いことをした後には実に気持が良い。 焼けつくような暑さの中をトラックの荷台に乗って 幾日もかかって砂漠の旅しなければならぬ老若男女の辛さを思えば これ位のことは何でもない。

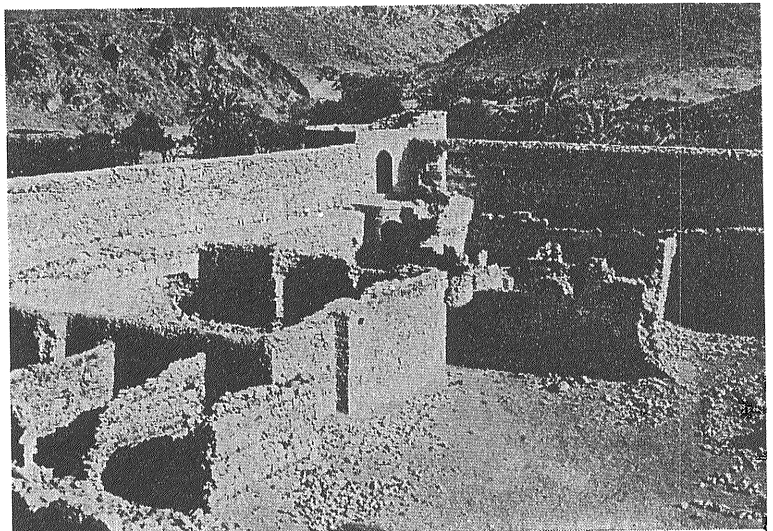
私たちが別のコースをたどった連中も無事に Al Wajh に着いた。 紅海の波打際からサンゴ礁の台地のうまで連なる白亜の家が 紅海の碧さに映えて 一きわ美しい。 Al Wajh 地域を治めているのは 現国王の弟に当たるナーセル皇太子だ。 色白でどちらかといえば瘦身の皇太子は 私たちにとっても親切だったし お供を連れて私たちのキャンプに来て アラビア料理をご馳走して下さっ

たこともあった。 ペルシアジュータンを敷きつめた私邸の広い応接間にマットレスを並べて 汗どほこりにまみれた作業服姿の 疲れ果てた私たちを仮眠させて下さったのもこの皇太子だった。 深いねむりからさめた私たちに ミカンやリンゴをわざわざ冷蔵庫で冷やしてご馳走して下さった皇太子。 お国柄といえればそれまでだが日本ではとても想像さえできないことだ。 こうした国では やはり 庶民の中の王族であることが必要なのかもしれない。

Al Wajh から第一次調査団のキャンプ地である Umm Gurayat 鉱山までは Wadi Zurayb と Wadi Hamalya とを通過して わずか 24 km の道程にすぎない。 Wadi Zurayb の入口には Magrona という名の井戸があり 数える程のナツメヤシがオアシスであることをわざわざ示している。 この井戸の傍には かつて権勢を誇ったトルコが建設した砦が今も残っている(第73図)。 西を向く正面入口にはトルコ語で書かれた額が残ってはいるが 砦の内側はほとんど崩壊していて昔日の面影をわずかに残しているにすぎない(第74・75図)。

Jeddah からおよそ680km 苦労もあったけれども とに角全員無事にキャンプ地にたどりついた。 今を去るおよそ3000年の昔 ユダヤの David 王によって開発された金山はここだ。 Umm Gurayat (部落の母) というこの鉱山の名は この鉱山を中心として Al Wajh 地域に無数の金山が発見・開発され この鉱山が 数多の鉱山部落の中心となることを願ってつけられたようで興味深い。 おそらく 当時の人々の 比類なき権勢の支えとなる無限の富へのあこがれか あるいは 欲望を卒直に物語っているのであろう。

(筆者は 鉱床部)



第75図 砦の内部